日本の文化

『日本の文化』

表題：日本の文化

著者：小林真人

発行者：日本文化協会

出版：2021年

日本は、多様な文化を誇る国です。歴史、美術、文学、料理など、さまざまな要素がこの国の文化を構成しています。本稿では、日本の文化を概観し、その特色を掘り下げます。
緊密に結びついた小さな集団

クラスと呼ばれる緊密に結びついた小さな集団は、学級運営の効果的な単位であり、いくつかの点で家族に似た特徴を有している。その特徴として、まず第一に、これらの集団は、算数クラスの給食、体育にいたるまで様々な活動をともにすることがあげられる。集団は、臨時的なものでも、社会の発達に関して、学業面だけでなく、社会的、情緒的、知的側面を支えるように期待されている。

集団の構成と運営

子どもたちは、クラスといった緊密に結びついた小さな集団のなかで、日常生活を学んでいる。しかし、そのでの学びは、ただ単に生じることだけでなく、その影には、集団の構成や運営、集団が従事する課題を織密にデザインする教師の働きがある。例えば、教師は、集団のメンバーを決める際、友だち同士を一緒にしたり、内気な子どもや遅れのある子どもを世話好きな子どもと一緒に、
総するなど、リーダーシップや社会性、絵や運動能力にいたるまで、子どもたちの多様な能力や性質を考慮した様々な方略を用いる。多様な構成員と日常の様々な活動を行わなうことで、子どもたちの要であった計画、みんなの前では、内気な子どもが班や集団のなかではおもしろいことを言ったりするなどお互いの強いところと弱いところの双方を学んでいく。日本の学校で、能力が強調されず、努力に重点が置かれている理由の一つは、学級での活動が、様々な能力が混合した集団で経験されることにあるかもしれない。また、このような多様な集団は、社会的にも学術的にも、子どもたちの発達に必要な資源を準備している。これらの集団は、幼稚園では、少なくとも一年、小学校一年生では、平均二か月維持され、その継続の長さも特徴の一つであるが、このことも集団における子どもたちの学びを支えている。安定した関係のなかで、子どもたちは、お互いのことをよく知るようにになり、それを土台にして様々な活動での協力者の仕方について学んでいく。教師は、集団を組み、新たな友人を協力関係を結ぶ機会の二種類の利点のバランスを考えながらその時期を決定する。集団を支える日常の活動
多くの教師が重要だと語るグループの“まとまり”の形成を支援している。また、活動そのものの対に対する評価についても、活動の正否はしばしば教師や子どもたちによつて公言されるが、その報酬としては、最初に準備ができて集団が一番最初に行うといったもので、得点などの外的報酬は用いられない。教師は、そのような外的な報酬に支えられた競争を「負けたグループは、その後の活動を一緒に楽しく行えないと、能力の劣する子供仲間から嫌われてしまうかもしれない」と、集団のまとまりを壊すものとしてできるだけ避けようと努めている。反省

日本の教師たちは、集団の一部となることは、子どもたちにとって、自然で楽しいことであると同時に、考える必要があることと考えている。そこで、他者と一緒に活動することとはどんなことかについて学んできいく最

反省

反省を経験せずに、一日も経過する内に集団での活動に有効な活動は、“反省”である。日本幼稚園の教員たちは、自分の協力の度合いを反省する。この反省の間、子どもたちは、何が適切であったか、ある活動のなかで、責任ある参加を行うことはどういったことなのかについて考え、そして、同時に他者の考えを聞く機会をもつ。この反省という活動の名づけは、
外国の文献から

小集団活動の功罪

日本の幼稚園や小学校を観察する間、私は、一般に子どもたちの他者との扱いに心地よいを感じたものである。非常に内気な子どもでもグループのなかではおしゃべりをし、自然な愛情と親密さがそこには存在していた。しかし、小集団の問題、強い力を持つものではないだろうかという疑問も浮かんできた。事実、最近、日本の学校で問題になっているいじめの背景には、集団の心理的圧力がある。クラスメイトからのからかいや無視によって、自殺を含む死の手段に訴える子どもたちがいる。アメリカでの研究は、小集団への参加は小集団の他者との活動を支配しているかである。小集団の中で、子どもたちは互いに公正さや敬意をもって扱うように促されているのか、それとも単にできるだけ敏速に課題をやってしまいるのか、反省の時間なのか、現に、時々、私は日本の教育現場で、集団に与えられている権威を支え、時々、クラスメイトの数を集計にした。彼等は、急げたクラスメイトの数を集計し、クラスに報告していた。日本の教師は、こ
まとめ

日本の子どもたちグループ活動は、アメリカでの“協同学習”を我々に思い出させる。実際、協同学習は日本で長い歴史をもつアプローチである。小集団を用いた教育法は、我々の協同学習の定義にあうことが示唆されている。しかし、以下に示すように、いくつかの点で日本の小集団学習は、アメリカのそれとは異なっている。

1. 日本の子どもたちは能力を自分たちでグループに分けられない。

2. 日本の子どもたちグループのなかで活動するとき、一般にグループとして活動する。その活動は相互に支え合うものであり、集団にいながら、個人の作業——例えば、ワークシート——を行うことが多くアメリカのそれとは異なる。

3. 日本の教師は一般に活動そのものがおもしろく興味をそそるものを選ぶ。一方、アメリカでは協同学習に対して、ポイント制やグループの成績など子どもたちに課題に取り組ませるために、外的報酬を用いる場合がある。

4. 日本の生徒や教師はグループの活動を社会的目標のもと、援助、友情、責任感などに見立てられている。アメリカの協同学習のなかにもそのような
実践を行い、見事な成功をおさめているものもあ るが、一方では、成績やポイントなどの外的報酬 を用いたり、子どもがいかに作業をしたかではなく、 協同作業の結果を強調したり、子ども自身の 反省ではなく、教師がその評価を行うということ が頻繁になされている。 日本の教師は、小集団やクラス、学校の理想的 な姿を家族という例えをもちいて描写する。この 例えは、学校を工場とか仕事場としてたとえるこ とが一般的なアメリカの学校とは対照的である。 この例えの比較から、単純に事実を一般化すること はできないが、少なくとも、そこには次のよう な示唆が含まれている。後者の「工場」とか、 "仕事場"という比喩は、過程より結果の重要 性を、前後の家族という比喩は、集団の恒久的で緊 密な結びつきともに、メンバーの発達のすべて の面に対する関心を表わしている。私がインテ

ビューした教師たちは、小集団活動の成功は単 純に起こっているのではなく、その裏には、注意深 く活動を組み立てる教師の懸けがあると言及して いた。集団での活動は、子どもたちの間に結び つきを育み、子どもたちが互いのポジティブな性質 を認め合うことができるように助けるものでなければ ならない。どのようないかが子どもたちの他者との活 動を支配しているかである。先にあげた小集団活 動の功罪と合わせて、小集団を支える価値やその 目標について、我々はもっと敏感でなければなら

（茶の水女子大学大学院）